

アダム・スミスとレトリック

篠原久

序

スミスの学者としての出発点はエディンバラ公開講義にあった。6年間のオックスフォード大学留学の後、故郷のカーコーディにもどったスミスは、ヘンリ・ホーム（ケイムズ卿）の後援のもとに、1748年から51年の冬期にかけて3回の講義をエディンバラで行なった。その内容は、文学および文芸批評 **literature and literary criticism** について2回、法学 **jurisprudence** について1回とされている。¹⁾これが非常に好評であったので、スミスは1751年の1月に母校のグラスゴウ大学から論理学教授として迎えられることになる。エディンバラでのいわゆる「文学講義」は、1762年から63年にかけてのグラスゴウでのスミスの講義の学生による筆記ノートがロージアンにより発見され、『修辞学・文学講義』²⁾として出版されることによって、その具体的な内容が知りえるようになった。

- 1) W.R. Scott, *Adam Smith as Student and Professor*, 1937, p. 51. 哲学に関するものが含まれていたとすれば、それはおそらく「古代論理学および形而上学史」であり、この場合には、文学に関する講義は1回に減少することになるとスコットは付言している。 *Ibid.*, p. 53.
- 2) *Lectures on Rhetoric and Belles Lettres Delivered in the University of Glasgow by Adam Smith Reported by a Student in 1762-63*, Edited with an Introduction and Notes by John M. Lothian, 1963. (以下 *L.R.* と略す。) この講義は「スミスがエディンバラで行なった修辞学と文学に関する公開講義を敷衍したものである。」 *L.R.* p. xii, 宇山直亮訳『アダム・スミス修辞学・文学講義』未来社, 1972年, 7ページ。

アダム・スミスとレトリック

た。修辞学・文学へのスミスの関心は、かれの個人的な文学的興味の問題として¹⁾かたづけられる性質のものではなく、広く、18世紀スコットランドの文芸復興、いわゆる「スコットランド啓蒙」**Scottish Enlightenment**の文化運動の一環として位置づけられねばならない。²⁾1707年のイングランドとの合邦以後、スコットランドは、イングランドへの対抗意識に支えられながら、経済的、文化的に近代化の軌道に乗り、**age of improvement**に入っていく。当時設立された多くの **Clubs** や **Societies** もこのスコットランドの **improvement** に大きく貢献していたのである。経済活動の面で代表的なものは、1755年に「選良協会」の下部機構として設立された「エディンバラ技術・科学・製造業・農業奨励協会」であろう。「スコットランド農業知識改良協会」は1723年に設立されていた。文化的な諸団体の貢献はさらに著しいものがあった。当時のいわゆる **literary clubs & societies** はすべて **debating societies** であり、会員の切磋琢磨 **mutual improvement** を目的としていた。その場合に、かれらを一つの団体に結びつけた共通の関心事は **language (speaking and writing)** であった。本稿は、スミスのレトリックの歴史的な位置づけという問題を念頭におきつつ、スコットランド啓蒙におけるレトリックの役割を考察しようとするものである。

I 18世紀スコットランドにおける **Literary Societies**

まず、当時の若干の文学的諸団体を取りあげ、それらの共通の特徴を確認し

- 1) スミスは、オックスフォードでは、大部分の時間をベリオル・カレッジの図書館で、ギリシャ・ラテンの古典およびフランスの文学作品の精読に費していた。J. Rae, *Life of Adam Smith*, 1895, p. 23, 大内兵衛・大内節子訳『アダム・スミス伝』岩波書店, 1972年, 28—9ページ。
- 2) 「スコットランド文芸復興の学問的思想内容は、ほぼ、四つにわけられる。第一は、スコットランド歴史学派とよばれるとおり、歴史叙述あるいは歴史哲学で、第二は、モラル・センス学派からコモン・センス学派へ発展する道徳哲学、第三は、美学・文学および文学理論、第四は、自然科学である。」水田洋『アダム・スミス研究』未来社, 1968年, 239ページ。

ておかねばならない。初期に属するもので代表的なものは、1716年にエディンバラで設立された「ランケニアン・クラブ」**Rankenian Club**¹⁾であろう。このクラブの目的は「自由な会話と合理的な探究による切磋琢磨」であり、会員のジョージ・ウォーレスによれば、ランケニアン・クラブは「思想の自由、探究の大胆さ、感情の寛大さ、推理の正確さ、趣味の正しさ、文章構成への関心、をスコットランドに普及させることに大いに役立った。」²⁾ 19世紀の一著述家はこのクラブについて次のように語っている。「イングランド語がスコットランドにおいて日常語となるであろうという予想、それが思想の最良の道具と伝達の最良の手段の一つにまでなるに至った完璧性、それがギリシャやローマの最も称賛すべき作品に匹敵し、あるいはそれを凌駕するような、無類の豊かでのたゆみなく前進する文学の温床となったということ——これらすべての事情が、イングランド語とイングランド文学の修得の重要性を確立させるのに与って大いに力があつた。……〔イングランドの模範的な文体〕に対する趣味が養われ、鼓舞されることが大いに望まれたのであり、これを正しい方向へ推進させることが、ランケニアン・クラブによって企図された重要な目的であつた。」³⁾

1752年に設立された「グラスゴウ文学協会」**Literary Society of Glasgow**は、その12人の創立メンバーのうち9人までがグラスゴウ大学の教授たちであつた。⁴⁾ 会員たちは「生物学、地質学、化学、経済学、詩、外科医学、植物学、

1) クラブの名称は、会合場所である居酒屋の主人ランケン Thomas Ranken に由来する。活動は1774年まで続いた。Sir Alexander Dick, Colin Maclaurin, Sir John Pringle, George Turnbull, Robert and George Wallace, William and George Wishart, John Stevenson らが主要なメンバーであつた。D. D. McElroy, *Scotland's Age of Improvement: A Survey of Eighteenth-Century Literary Clubs and Societies*, 1969, pp. 22—26.

2) *Ibid.*, p. 22.

3) *Ibid.*, p. 26.

4) ギリシャ語教授 James Moor, 医学教授 Robert Hamilton, 神学教授 William Leechman, 論理学教授 James Clow, 法学教授 Hercules Lindsey, 自然哲学教授 Robert Dick, 人文学教授 George Ross, 解剖学教授 William Cullen, 道德哲

アダム・スミスとレトリック

歴史、哲学、物理学、農学」などの広汎な学問領域に関心を寄せていた。¹⁾ 定例会が軌道に乗るに先立って、3回の新刊紹介のための準備的な会合がもたれ、第1回はカレンがモペルティエの『宇宙論』、第2回はクローがハリスの『ヘルメス』、第3回はスミスがヒュームの『商業論』を紹介した。²⁾ 定例会の最初の報告は、ムーアの「歴史的な文章構成について On Historical Composition」であった。この「文学協会」でスミスは「言語論 An Essay on Language」と『道徳感情論』の一部を報告したといわれている。³⁾

1752年に活動を再開した「エディンバラ哲学協会」Philosophical Society of Edinburgh⁴⁾ も「文学協会」に劣らず、広汎な学問領域に関心を寄せていたが、とりわけ自然哲学の知識を普及させることを主目的としていた。ところがこの

学教授 Adam Smith. (*Ibid.*, p. 41.) 52年当時のグラスゴウ大学には、このほかに、数学、東洋語、教会史を加えて、計12の講座があった。天文学の講座は60年に設けられた。Scott, *op. cit.*, p. 84. (cf. Table to face p. 224) この文学協会の活動期間はおそらく1780年ごろまでであろう。McElroy, *op. cit.*, p. 43.

- 1) *Ibid.*, (Introduction) p. ii.
- 2) *Ibid.*, p. 41. Maupertuis, *Essai de Cosmologie*, 1750, Harris, *Hermes ; or Philosophical Inquiries Concerning Language and Universal Grammar*, 1751. Hume の *Essays on Commerce* は *Political Discourses* に取り入れられ、1752年に出版された。この *Essays* は「公刊に先立ってスミスが目をとおしたのだろう。」Rae, *op. cit.*, p. 95, 邦訳115ページ。
- 3) Scott, *op. cit.*, pp.120—21.
- 4) この協会の出発点は、1731年に Alexander Monro the elder (エディンバラ大学初代解剖学教授)らによって設立された「医学知識改良協会」にあった。1737年に Colin Maclaurin らが自然哲学の全領域にまでその関心を広げるようこの協会に提案した結果、それ以後 Society for Improving Natural Knowledge あるいは Society for Improving Arts and Sciences として新たな活動を開始することになる。「哲学協会」の活動の発端はここにある。McElroy, *op. cit.*, pp. 27-28, p. 35. 45年の「ジャコバイトの反乱」以降の数年間は定期的な会合は中断されていた。48年から51年にかけてのスミスのエディンバラ公開講義はこの「哲学協会」で行なわれたようである。Scott, *op. cit.*, pp. 49-50. スミスは52年に会員となっている。この協会は1783年に「エディンバラ王立協会」Royal Society of Edinburgh となった。

場合に、会員たちは、単に知識、情報の内容だけではなく、その内容の表現の仕方に多大の注意を払っていたのである。54年にカレン教授が「化学研究管見——塩類のさまざまな種を確認するための一試論」という論文を提出し、これが協会の承認をえて、機関誌 *Essays and Observations* に掲載されることになったが、かれの友人ブラック Joseph Black は、ケイムズ卿（当時の副会長）がカレンの論文の文章構成の誤りを指摘し、他の会員もその文体の冗長さをとがめたこともあって、それをカレンのもとに送り返している。¹⁾ これに対して、「アバディーン哲学協会」 *Philosophical Society of Aberdeen* ²⁾ においては、「すべての文法的、歴史的、および言語学的な討論は会の意図にはふさわしくないので、論説および質問の主題は哲学的でなければならない」とされていて、「文体、発音、あるいは文章構成に対する批評」は会則によって禁じられていた。³⁾ ところが、この「哲学協会」の最初の報告は、キャンベル George Campbell の「雄弁の本質、そのさまざまな種類とそれらの目的」であった。かれは以後13年間に亘って（最後の報告は1771年）、「雄弁の論理学に対する関係」「雄弁の文法に対する依存関係」「辞句上の批評に関する規範」「文と総合文を連結する語」などを次々に発表した。⁴⁾ マケルロイは、当時の「他のすべてのスコットランドの文学的諸団体の目的とは矛盾するように思われる」この「哲学協会」の会則の意図するところは、「思想表現形態のより重要な側面」への関心にあったと解釈し、「会員たちが避けようとしていたのは、文体の微妙な点についての口論であり、かれらの論説の内容や全般的配列への評価は、これを

1) McElroy, *op. cit.*, p. 36.

2) 1758年にリードとキャンベルらによって設立され、73年まで活動を続けていた。以下に示した主要なメンバーはすべて（教授その他として）アバディーン大学に関係していた。John Gregory, Thomas Reid, William Ogilvy, James Dunbar（以上 Kings College）, George Campbell, David Skene, John Stewart, Thomas Gordon, George Skene, James Beattie（以上 Marishall College） *Ibid.*, p. 45.

3) *Ibid.*, p. 45.

4) *Ibid.*, p. 46. キャンベルはこれらを『レトリックの哲学』のタイトルの下に1776年に刊行した。

アダム・スミスとレトリック

歓迎したのであった。そうでないと、他の会員の是認を求めるために論説を提示しても意味がなかったであろう」と結論している。¹⁾ 報告や質問の時間が厳密に規定されているところからみて、²⁾ 論争好きのスコットランド人には、この種の会則もまた必要であったのかもしれない。

1754年に画家アラン・ラムジーが、スミスとヒュームに相談をもちかけて設立した「選良協会」**Select Society (of Edinburgh)**³⁾ は、その目的として、「哲学的探究の遂行と会員の話術の向上」を掲げている。この協会を母体として翌年に「エディンバラ技術・科学・製造業・農業奨励協会」が、61年には「スコットランドにおいてイングランド語の **Reading** と **Speaking** を促進させるための協会」が設立された。前者は懸賞を与えることによって産業奨励を行なうことを目的とし、会合の討論の内容も経済的なものであった。⁴⁾ 後者は、かつてのダブリンの劇場支配人トマス・シェリダンが61年の6月から7月にかけてエディンバラで行なった **English Tongue** と **Elocution** についての一連の講

1) *Ibid.*, p. 46.

2) 「報告は30分を超えてはならない。……〔コメントへの〕報告者の反論に対しては、出席者の許可なしに応答してはならない。……質問を〔前もって〕提出した会員がまず発言権をもつ……どの会員も出席者の許可なしに二度発言しえない。」*Ibid.*, p. 45.

3) オリジナル・メンバーは15名で、3人の立案者の他に、Alexander Wedderburn, James Burnett (Lord Monboddo), Alexander Carlyle らがいた。最初はこの **select membership** を維持するつもりであったが（——**Select** の名称の由来, I.S. Ross, *Lord Kames and the Scotland of his Day*, 1972, p. 177), 約1年後には会員は83人に増え、その後130人にまでふくれあがった。この「雄弁のためのすばらしい学校」にはスコットランドが生み出した著名な人物はほとんど含まれていた。John Home, William Robertson, Sir David Dalrymple, Sir Gilbert Elliot, Sir Alexander Dick, Lord Kames などが後に会員となった。McElroy, *op. cit.*, pp. 48-9. 「選良協会」の活動時期は1763年ごろまでであろうと推測されている。*Ibid.*, p. 63.

4) レーは、この「奨励協会」の活動と母体の「選良協会」とのそれとを混同している。「選良協会」は他の文学的諸団体と同様に、広汎な主題に関心を寄せていたのである。Cf. Rae, *op. cit.*, p. 110, 邦訳134ページ。McElroy, *op. cit.*, p. 49.

義に起因している。かれは「英国の教育の一般的水準を向上させる手段として、演説法 *elocution* とレトリックとが有効であることを熱心に信じていた人物である。」¹⁾なお、「選良協会」には「会員および非会員から提出される *Arts* と *Sciences* に関する論文、質問、および発見を検討するための」四つの委員会（「自然史と化学」「数学」「文学と批評 *Belles Lettres and Criticism*」「歴史と政治学」のための諸委員会）が設けられていたが、スミスは、ヒューム、ブレア、ウィッシャート、ウィルキーと共に文学と批評部門の委員であった。²⁾

1759年に設立された「ベル・レトル協会」*Belles Lettre Society*³⁾は、「趣味を解する *Gentlemen* が、互いに意見を交換し、切磋琢磨する適正な機会が失なわれないように」という意図から組織されたものであり、*liberal studies* を促進させることが目的とされ、会員は「論述において明瞭な簡潔さ *perspicuous brevity* を学ぶ」ことを要求されている。⁴⁾⁵⁾

以上の文学的諸団体は、いずれも今日的な狭い専門分野にとらわれず、広汎な学問領域から話題を選び出していたが、このことを通して、それらに共通にみられる特徴は *language* に対する強い関心であろう。これは二つの側面を有

- 1) *L.R.*, pp. xxxiv-v, 邦訳50ページ。シェリダンの *English Tongue* についての講義は「スコットランド人がイングランド語を修得する際の特有の諸問題」に向けられ、*Elocution* の方は「発音、アクセント、語勢、休止、語調、および音声、抑揚、身ぶりの処理」というような項目を含んでいた。McElroy, *op. cit.*, p. 56. レトリックにおけるシェリダンの位置づけについては本稿85-6ページを参照。
- 2) *Ibid.*, p. 54.
- 3) エディンバラ大学の構内で毎週会合をもったこの協会には、William Robertson, Alexander Dick, David Hume, Hugh Blair, John Stevenson, Adam Ferguson, John Home, William Cullen らが名誉会員に選ばれていた。64年ごろまで活動を続けていたであろうといわれている。*Ibid.*, pp. 106-8.
- 4) *Ibid.*, (Introduction)p. ii. マケルロイによれば、当時の *liberal studies* は、今日の *language, philosophy, literature, abstract sciences* に相当する。なお、中世における *liberal arts* は、*grammar, rhetoric, logic* (以上 *trivium*), *arithmetic, geometry, music, astronomy* (以上 *quadrivium*) から成っていた。
- 5) *Ibid.*, p. 106.

アダム・スミスとレトリック

している。一つは標準英語**Standard English**のマスターを目的とする話術の向上、もう一つは、科学的知識の伝達、換言すれば、説得的な表現能力の養成である。前者には、1707年のイングランドとの合邦以後の特殊スコットランド的背景があった。合邦後、スコットランドはロンドンへ議員を送りこむことになり、にわかに**spoken language**が問題となりはじめ¹⁾、スコットランドなまり **Scotticism**の克服に努力が払われた。またイングランド語を母国語化することになるような初等教育上における変化がスコットランドにおいてみられはじめた²⁾。さらに当然のことながら、イングランドにおいて職業上の高い地位に就くためには、どうしても標準英語の修得が必要であった。61年に「選良協会」が「スコットランドにおいてイングランド語の**Reading**と**Speaking**を促進させるための協会」を発足させた背景にはこういう事情がからんでいた。これに対して後者、すなわち、知識の伝達、表現能力の養成という側面は、広く、レトリックの領域にかかわるものである。学問上、科学上の新しい真理、知識の発見は、これを学者仲間はもちろんのこと、一般大衆にも明快に伝達しえるのでなければ、それらの社会全般への普及は期待しえない。この知識の伝達 **Communication** という役割を18世紀の〔新しい〕レトリックが受けもったのである。この点を理解するために、次にスミス当時におけるレトリックの内容に目を転じなければならない。

II 新しいレトリック

i) スミス当時の論理学とレトリック

前述のように、スミスは1751年に母校グラスゴウ大学の教授に迎えられたが、その担当講座は論理学であった。スミスの講義の聴講生であって、後に同大学

1) E.C. Mossner, *The Life of David Hume*, 1954, p. 371.

2) McElroy, *op. cit.*, p. 56.

3) W.S. Howell, *Eighteenth-Century British Logic and Rhetoric*, 1971, pp. 156ff. アイルランド人シェリダンとスコットランド人ウェダバーンの努力が典型的な例としてあげられている。

の法学教授となったジョン・ミラー¹⁾の報告によれば、スミスは旧来の論理学に新しい内容をもりこんだようである。²⁾

「スミス氏は、この大学に着任すると論理学教授に任命されたが、この講座において、かれは先任者たちが守ってきた講義計画から大きく逸脱して、学生たちの注意をスコラ学派の論理学や形而上学よりもずっと興味があり、かつ有益な研究に向かわせることが必要だと悟った。したがって、かれは、精神の諸能力にかんする一般的見解を述べ、そして、古代論理学について、かつて広く学者たちの注意をうばっていた技巧的な推理方法を、好奇心を満足させるに必要なだけ説明した後は、残りのすべての時間をレトリックと文学の一体系 a system of Rhetoric and Belles-Lettres の講述にあてた。人間精神のさまざまな能力を説明し、例証する最善の方法は、形而上学のもっとも有益な部分であるが、それはわれわれの思想をことば speech によって伝達するいくつかの方法の吟味と、説得や慰楽に寄与する文章構成の諸原理への注目から発生する。これらの技術によって、われわれが認識したり感じたりするすべてのことや、われわれの精神のすべての作用が、明確に区別され記憶されるような仕方では表現され描写される。同時に文学の諸部門のうち、はじめて哲学を学ぶ青年にとって、これほど適切なものはなく、それはかれらの趣味と感情をとらえるのである。」³⁾

この論理学講義の新しい方向づけは、スミスの後任者、ジョン・クロウとジョージ・ジャーディーン⁴⁾に受け継がれてゆく。トマス・リード⁵⁾がジャーディーン

- 1) John Millar は、11歳の時(1746年)グラスゴウ大学に入学し、少なくとも6年間在学していた。W.C. Lehmann, *John Millar of Glasgow*, 1960, p. 11. かれは「新任の教授〔スミス〕がエディンバラからもたらしたさかんな評判をきいて、すでに大学の全課程を修了していたにもかかわらず、もう一度その講義をきこうと思いたったのである。」Rae, *op. cit.*, p. 43, 邦訳 54ページ。
- 2) これは(後に明らかになることだが)より正確には、<新しい論理学の出現に対応して、旧来のレトリックに新しい内容をもりこんだ>というべきであろう。
- 3) Dugald Stewart, *Biographical Memoir of Adam Smith, Collected Works of D. Stewart*, 1858, vol. X, p. 11.
- 4) 1752年に道徳哲学教授のクレギー Thomas Craigie が病死したことにより、スミスは論理学から道徳哲学の講座に移る。その後の論理学の講座は、52年から87年までは James Clow が、87年以降は George Jardine が担当した。
- 5) かれは、スミスが64年にグラスゴウ大学を退職したあと、その後任(道徳哲学教授)に選ばれ、その死(96年)までその職にあった。

アダム・スミスとレトリック

ンの論理学講義の内容を報告しているので、われわれはそこにおいて、スミスの影響の具体的な形跡をみることができる。上述のミラーの報告と比較されたい。

「一般に論理学は教える順序としては、他の二者〔道德哲学と自然哲学〕に先んじてきたのであって、それらに対する必要な準備科目と考えられていた。学生が道德哲学と自然哲学に進む前に、推理と討論の技術を教えることが適切であると考えられた。そしてアリストテレスの『分析論』から生れた三段論法の技術は、ずっと古い時代から、その目的のためのもっとも有効かつ無過誤な道具と考えられてきた。それはあらゆる場合に、真理と虚偽を正確に区別する機械的な推理方法を与えるものと想定された。しかし、文学の諸題目と、それらを理解する手段についての意見の変化は、大学の学科のこの部分〔論理学〕の取扱い方に、それに応じた変化をもたらした。現在の教授〔ジャーディーン〕は、悟性の能力を手短かに分析し、かれの講義内容を理解するのに必要な名辞を説明した後に、推論の技術、特に長い間学界に普遍的な影響力を及ぼしていたために好奇心の対象となった三段論法の興隆と進歩とを歴史的に眺めている。そのあとでさまざまな精神の作用が、ことばや文章 *speech and writing* のいくらかの変形によって表現される仕方の解明に大部分の時間を割いているのであるが、このことが、文法一般、レトリック、および文学についての系統的な講義をすることになるのである。この講義は、学生に適切な練習と範例とを与えれば哲学への入門として置かれて然るべきものである。青年の趣味と感情が開花しはじめ、思索と探究という重要な習慣を身につけるための事実と資料をかれらに与えるのに必要な著述家たちを自然に読みたくなるような時期においては、この主題ほど青年たちにとって興味深いものはない。¹⁾」

スミスのレトリック講義に対する評価は論理学との関係においてなされねば

1) T. Reid, *Works*, vol. II, ed. Hamilton, 1846, p. 735, cited by Lothian in *L.R.*, pp. xxx-i, 邦訳42—3ページ (訳文加筆, 以下同様)。リードはケイムズ卿の依頼の下に “A Brief Account of Aristotle’s Logic. With Remarks” を執筆し、そこにおいてアリストテレスの三段論法の不毛性を指摘している。この論文は、ケイムズ卿の『人間史素描』(1774年)の Appendix となったが、1806年に *Analysis of Aristotle’s Logic, with Remarks* として独立に出版された。Howell, *op. cit.*, pp. 378, 397.

ならない。ハウエルによれば、¹⁾ イギリスの論理学とレトリックは18世紀に入ると、その内容、形式ともに大きな変化が生じるに至った。そして18世紀末の状態をながめてみれば、論理学には、対立する二つの形態があり、レトリックには、四つの形態が存在していた。

まず論理学においては、一方にアリストテレスの伝統を受け継ぐ古い論理学があった。それは次の諸点を強調する。(1)論理学は「探究」と「知識の伝達」の双方の役割を受けもつ。(2)容認された真理を演繹的に吟味することが探究の主たる手順である。つまり、公理その他の自明の命題から演繹的な分析によって抽出された結論は、もしもその分析が規則に則って行なわれたものであれば、結論の妥当性はこれを疑うことができない。探究の任務はこういう演繹的な分析にあるということ。(3)三段論法が論理学の主たる道具である。(4)「総体および皆無の原理」*dictum de omni et nullo*²⁾ は論理学の全技術がひきだされるところの自明の公理である。(5)真理は討論によってテストされ、同時に学界に伝達しうるので、スコラ的論駁が探究と伝達の分野における顕著な哲学的行為となる。(6)論題 *topics* は問題点を探究し、またそれらを組織立った論説に仕上げるのに役立つ有益な手段である。(7)ある命題の真理は、すでに容認された命題と(三段論法によって)矛盾しないことが示された場合に確立されたものとなる。つまり *truth* と *consistency* は完全に同一概念である。³⁾

他方、ベーコンとロックに示唆をえた新しい論理学が存在していた。トマ

-
- 1) 以下の、論理学とレトリックの内容の変遷の紹介は、Howell, *op. cit.* に基づいたものである。かれの1969年の論文“Adam Smith's Lectures on Rhetoric: An Historical Assessment”, *Speech Monograph*, vol. xxxvi は“The New Rhetoric Comes of Age: Adam Smith's Lectures at Edinburgh and Glasgow”として同書(chap. 6, sec. iv)に再録されている(*Ibid.*, pp. 536-76)。
 - 2) これは「あるクラス〔類〕の各成員について肯定または否定されるところのすべてのものは、そのクラスの部分クラス〔種〕についても肯定または否定される」ということであり、古い論理学においては、あらゆる知識の妥当性の源泉とされた。Howell, *op. cit.*, p. 48.
 - 3) *Ibid.*, pp. 695-6, cf. 259-60.

アダム・スミスとレトリック

ス・リード, ジョージ・キャンベル, およびデューガルド・ステュアートがその主唱者である。この論理学は上述の7点において伝統的な論理学とは意見を異にする。(1)論理学は最終的には伝達の理論から袂を分かち、科学的探究の方法にその関心を向けるべきである。(2)探究の任務は、命題の辞句上の検討にあるのではなく、事実の経験的・実験的検討にある。(3)論理学における最も基本的な道具は帰納法である。三段論法は未知の真理を発見する力をもっていない。(4)「総体および皆無の原理」は論理学の理論の全内容を提供しえない。それは実験諸科学から引き出された規範によって代置さるべきである。(5)論駁は探究の手段としてはふさわしくない。学問上の仮説の妥当性を判定する手段としては、実験と観察が論駁にとって代わらねばならない。(6)古代の論題の装置 **machinery of topics** は無視してよい。(7)ある命題が真理であるのは、それが容認された諸命題と矛盾しないからではなくて、検討下の事実と一致する、もしくはその事実を正確に解釈していることが示されたからである。

次にレトリックの方に目を転ずれば、まず古代ギリシャ・ローマ(アリストテレス, キケロ)の理論を受け継いだ「18世紀キケロ主義者」がいる。ウォード **John Ward**, ホームズ **John Holms** がその代表者である。このレトリックの理論は「発見 **invention**, 配列 **arrangement**, 文体 **style**, 記憶 **memory**, 演説 **delivery**」の5部門から成っており、その特徴は次のごとくである。(1)レトリックの取り扱う範囲を、説得的な大衆向けの論述 **persuasive popular discourse**, つまり儀典弁論(演示型弁論), 討議型弁論, 法廷弁論に限定する。(2)非技術的立証ではなく、技術的立証を強調し、主題の発見 **invention**²⁾ のた

1) **artificial proof** というのはレトリックの技術から生まれてくるものであるのに対し、**inartificial proof** はレトリックの技術によらずに、外的な事実を利用するものである。Cf. *ibid.*, p. 99. アリストテレスは次のように規定している。「非技術的なものと私の言うのは、われわれによって獲得されたものではなくて、前以て存していたものことである、例えば証人、拷問、契約書等々であるが、技術的なものと言うのは方法によって、またわれわれによって構成されることのできるものことである。従ってこれらのうち一方のものは使用し、他方のものは発見しなけれ

めの論題 **topics** の装置を有益だと考える。(3)立証の方法としては省略三段論法 **enthymeme** を用い、帰納法は **enthymeme** の変形だと考える。(4)弁論の文章構成 **composition** の合理性を保証するものとして、あいまいな蓋然的立証で満足する。(5)弁論は「序論 **exordium** (introduction), 解説 **narration**, 区分 **partition**, 立証 **proof**, 反駁 **confutation** (refutation), 結論 **peroration** (conclusion)」の六部門構成をとらねばならない。(6)率直で飾りのない文体 **plain and unadorned style** よりも、比喩やことばのあや **tropes and figures** (of speech) を多用した荘重な文体 **grand style** の方が、よりレトリック的である。⁸⁾

次にレトリックの第二の形態として **stylistic rhetoric** が、第三の形態として **elocutionary movement** がある。これらの二形態は、16世紀のペトルス・ラムスがキケロのレトリック理論を構成する「発見、配列、文体、記憶、演説」のうち、前二者を論理学の領域に移し、レトリックの管轄権を文体と演説に限定させたことに由来するものであって、⁴⁾ **stylistic rhetoric** は文体 **style** (とく

ばならないということになる。」山本光雄訳『弁論術』(『アリストテレス全集』岩波書店、第16巻10ページ。)

- 2) レトリックにおける **invention** というのは「取り扱う論題 **topics** あるいは用いようとする議論 **arguments** の発見あるいは選択」(**O.E.D.**) のことであって、古い論理学での発見もこれと同じような意味で、「われわれの精神がすでにもっている知識から、われわれの考慮する目的にかなうものを取りもどし、あるいはよび出すこと」なのである。F. Bacon, *The Advancement of Learning*, Everyman's University Library, p. 127, 服部・多田訳『学問の進歩』岩波文庫、218—9ページ。
- 3) Howell, *op. cit.*, pp. 696-7, cf. pp. 441-7.
- 4) レトリックに対するラムスのこのような処置に対して、ハウエルは次のようなコメントを加えている。「材料と設計とに対する建築学の伝統的な関心が、もしも完全に工学に移転されるようなことになれば、建築学は自己のものとして主張すべき重要なものはもたなくなつて、舞台からまったく姿を消さねばならないか、もしくは家屋の塗装と壁紙はりのような残りものの仕事で自らを慰める破目におちいるであろう。ラムスはレトリックをまさにこのような状態に置いたのであった。」*Ibid.*, p. 79.

アダム・スミスとレトリック

に文飾の豊かな表現)を、**elocutionary movement** は演説 **delivery** (とくに発声法)を強調する。¹⁾ 前者の主唱者としてバートン **Nicholas Burton**, ブラックウォール **Anthony Blaskwall**, スターリング **John Stirling**, 後者の代表者としてヘンリ **John Henley**, シェリダン **Thomas Sheridan**, ウォーカ **John Walker** があげられる。²⁾

最後に「新しいレトリック」が存在していた。これはその淵源をベーコン、ロックに遡れるものであって、代表者はアダム・スミス、ジョージ・キャンベル、ヒュー・ブレア、ジョン・ウィザスプーンである。このレトリックは、前述の「18世紀キケロ主義者」にみられた6つの特徴点に関して対立的な見解をうち出す。(1)レトリックは伝統的な三種類の弁論(演示型弁論, 討議型弁論, 法廷弁論)に関心を有しつつも、新しい論理学がその管轄権を放棄した学問的知識の伝達 **learned communication** の役割を自己の領域の中に取り入れ、最終的には、説得的, 教訓的(哲学=科学的), 歴史的, 詩的な表現形態の文章構成とその批評の模範を提供することによって **literature** の一般理論となるべきである。(2)技術的立証, および主題の発見のための古代のトピックの装置は必要でなく, 非技術的な立証が重要だと考える。(3)レトリックの議論においては帰納法に頼るべきである。(4)議論が蓋然的なものであっても, その蓋然性は科学的方法論に基づいたものでなければならない。(5)弁論は(序論から結論に至る)複雑な6部門構成をとる必要はなく, 簡明な形態(命題とその証明)でよい。(6)率直で自然な文体 **plain and unstudied style** が推奨される。³⁾

以上にみられるごとく, レトリックの内容の変化は, 論理学のそれと対応し

-
- 1) 前者は詩や小説やドラマの文体(表現)上の分析にも有益だとされ, 後者の内容は, 祈禱書の朗読や舞台上の対話のやりとり, および上流社会での優雅な会話にも適用された。 *Ibid.*, p. 697.
 - 2) *Ibid.* Select Society の下部機構 **Society for Promoting the Reading and Speaking of the English Language in Scotland** の設立に際しては **elocutionist** トマス・シェリダンの影響が大であった。(本稿78-9ページ参照。)
 - 3) *Ibid.*, pp. 697-8, cf. pp. 441-7.

ているのである。スミスの *Rhetoric and Belles Lettres* の意図は、「哲学への入門」である論理学において、「学生たちの興味に対して、理知的な面よりもむしろ情緒的な面でのアピールを目ざし、かれらの推理能力よりもむしろ感情および美的感覚を刺激しよう¹⁾と試みた」こと¹⁾にあったといえるであろうが、論理学との関係からいえば、かれの関心は知識の伝達の部門をレトリックの分野において発展させようとしていたことにあると解される。以下において、スミスのレトリック講義の主たる構成を、このような観点から考察してみたい。²⁾

ii) スミスのレトリック講義

ミラーによれば、スミスのレトリックの内容は「われわれの思想を *speech* によって伝達するいくつかの方法」と「文章構成の諸原理」に大別されることになる。³⁾ スミスの全30回の講義(学生の筆記ノートには第1回目の講義が欠けている)のうち、2講から11講までが前者に属し、12講から30講までが後者に属す。スミスはまず、観念の明確な伝達の重要性を述べ(第2講)、この点に関して近代語(特に英語)のもつ問題点を剔出するために「言語の起源と進歩について」(第3講の標題)⁴⁾ 1講を費やしている。かれはそれを<言語の進歩とそれが言語の本来の目的に及ぼす影響>⁵⁾ という観点から考察する。「特定の諸対象をしめすた

1) *L.R.* p. xvi, 邦訳 15ページ。

2) この場合、新しいレトリックの6つの特徴点に言及されねばならないが、第3点と第4点については、スミスは明示的な意見を出すに至っていない。これらの点はキャンベルによって積極的にとりあげられることになる。Howell, *op. cit.*, p. 575.

3) 本稿81ページ参照。

4) 講義に標題が付されているのは、この第3講と、第6講(いわゆる比喩とことばのあやについて)、第12講(文章構成について)のみである。

5) ベリによれば、18世紀に類出した多くの「言語起源論」は次の二つの一般的な問題点に関心を寄せていた。一つは、「言語の制定にとってすでに結合した社会が必要であるのと、社会の設立にとってすでに発明された言語が必要であるのとどちらがより必要なものであろうか、という問題」であり(J.J. Rousseau, *Discours sur l'origine de l'inégalité parmi les hommes*, 1754, p. 60, 本田・平岡訳『人間不平等起原論』岩波改訳版, 1972年, 67ページ。ルソーは、この問題は「それを企

アダム・スミスとレトリック

めに、特定の諸名称を指定すること、すなわち、実名詞の設定が、おそらく、言語の形成への最初の数歩のうちのひとつであったであろう。……動詞は必然的に、言語の形成にむかってのひじょうにはじめての企てと、同時代のものであったにちがいない。……われわれの断定の主題であるこの事件またはこの事実をしめす語は、つねにひとつの動詞であるにちがいない。¹⁾たとえば、未開人にとって、tree は「その果実がかれの飢えをすくった、特定の木」であり、venit は「ライオンのような特定の対象がくることを示していた。」²⁾ところが「ひとつの対象にたいして、それにほぼ類似したもうひとつの対象の名称をあたえ、こうして、もとは個体を表現するつもりであったものによって多数者をしめすという」³⁾人類の自然的性向によって全称名辞 general term が発明されるようになると、特定の対象物を示すには、性質を表現する形容詞や、関係性を表現する前置詞が必要になってくる。同様に、動詞も一般的な対象に用いられるようになると、特定の事件を表現するには、「形而上学的な分割」⁴⁾ metaphysical division がなされねばならない、つまり事件を主語と述語という構成要素に分解する必要が生じる。「歩いているアリグザンダーという観念また

てようとする者に譲ることにしよう」と述べている)、他は、「さまざまな品詞が存在する理由をどう説明するか」という問題である。モンボド卿の『言語の起源と進歩について』(6vols, 1773-92) は前者に関心を寄せ、スミスは後者を考察の対象としている。C.J. Berry, "Adam Smith's *Considerations on Language*", *Journal of History of Ideas*, vol. 35, 1974, p. 133.

- 1) A. Smith, "Considerations concerning the First Formation of Languages and the Different Genius of Original and Compounded Languages" in *The Theory of Moral Sentiments* [Kelley's reprint], pp. 507, 524. 水田洋訳『道徳感情論』筑摩書房, 1973年, 507, 519ページ。スミスのレトリック講義中の「言語の起源と進歩について」の完成した形態は『道徳感情論』の第三版(1767年)以降の付録としての「諸言語の最初の形成および本源的ならびに複合的諸言語の特質のちがいについての諸考察」においてみられるので、以下の引用はこれによることにする。
- 2) pp. 507, 525, 邦訳, 507, 520ページ。
- 3) *Ibid.*, p. 509, 邦訳 508ページ。
- 4) *Ibid.*, p. 524, 邦訳 519ページ。

は概念は……完全にひとつの単純な概念なのである。したがって、この事件を二つの部分に分割することは、まったく人為的であり、言語の不完全性の結果であり、この不完全性は……断定することが意図されている事実の全体を一度に表現しえなはずの語の欠如を、いくつもの語でおぎなうのである。¹⁾はじめのうちは、性質や関係は、名詞の語尾変化や格によって、人称代名詞は動詞の語尾変化によって表現された。ここから古代諸言語における格および語尾変化の複雑さが生じるに至ったのである。しかしこの種の複雑さは、さまざまな国民の混合（諸言語の混合）によって単純化された。前置詞や補助動詞（存在動詞、所有動詞）の使用によって、語尾変化の複雑さが回避されたのである。ところが、「諸言語のこの単純化は、それに対応する諸機械の単純化とおそらく類似した諸原因から生じるのだとはいえ、けっして、類似の諸効果をもつものではない。諸機械の単純化は、それらをますます完全にするが、²⁾諸言語の諸基礎のこの単純化は、それらをますます不完全にし、言語の諸目的のうちのおおぐにたいして、ますます不適當なものとなる。³⁾」その理由としてスミスによってあげられているのが、言語の冗長化、語尾の多様性が失なわれる結果としての耳にたいする快適さの減少、語を特定の位置にしばりつける拘束性である。⁴⁾そして「その形成の特殊性によって不可避免的に英語の中に導入されたこれらの大き

1) *Ibid.*, p. 524, 邦訳 519ページ。

2) 「すべての機械は、一般に、最初に発明されたときには、それらの原理においてきわめて複雑であって、それらが遂行すべきことを意図されている個々の運動のおのおのについて、個別的な運動の原理があるということが、しばしばである。ひきつづく改良者たちは、ひとつの原理が、それらの運動のうちいくつかを生みだすように適用されうることを観察し、こうしてその機械はしだいにますます単純なものとなり、まえより少ない車輪、少ない運動原理をもって、その諸効果を生み出すのである。」*Ibid.*, p. 535, 邦訳 527ページ。

3) *Ibid.*, p. 535, 邦訳 527-8ページ。

4) *Ibid.*, p. 536, 邦訳 528ページ。「機械は単純なほどよいが、言語は、単純になるに従って、多様性と調和を失ない、多様な配列が出来にくくなる。そして最後に、それはより冗長になる。」*L.R.*, p. 11, 邦訳 78ページ。

アダム・スミスとレトリック

な欠点」がどの程度まで矯正されてきたかということが、ひき続き第4講以下で考察されているのである。¹⁾ スミスは特に最後の点、つまり語の配列についての観察に重点をおいている。というのは、「これが自然的に私のいわゆる文体の考察に導く」²⁾ からであり、「作家の文体は一般にかれの性格と同じ特徴をもつ」³⁾ からである。そして文体についてのスミスの最終的な見解が、第11講の冒頭において述べられることになる。

「これまでの講義のいくつかにおいて、われわれは英国のもっともすぐれた散文作家の中の何人かの一つの性格をあげ、その各人における現われ方の相異を比較した。それらの作業のすべての結果は、これがわれわれの定めた規則でもあるわけだが、文体の完全性は作者の思想をもっとも簡潔、適切、正確な方法で、つまり、その思想がかれの心中をかきたて、……またかれが読者に伝達しようと意図している感情、情念、感動をもっともよく伝える方法で表現するということにある。そんなものは常識にすぎない、と諸君はいうであろう。まさにそれは常識以上のものではないのである。しかしよく注意してみれば、批評と道徳 *criticism and morality* のすべての規則は、その基盤までたどってみると、どの人も同意する常識のなんらかの原理であることがわかるのである。これらの学芸のすべての任務は、これらの規則をさまざまな主題に適用し、そのように適用された時に結論がどうなるかを示すことなのである。われわれが上述した作家たち⁴⁾ についてこのような考察を加えたのは、この目的のためである。著述に対してと同様に会話や行動にも適用するような規則に、かれらがどの程度まで自らを適合させたかをわれわれは示したのである。⁵⁾」

スミスが、単純で率直な文体 *simple and plain style* を推奨し、比喩やこ

1) *L.R.*, p. 12, 邦訳 79ページ。

2) *L.R.*, p. 14, 邦訳 83ページ。

3) *L.R.*, p. 31, 邦訳 113ページ。

4) スウィフト、テンプル、アディソンがとりあげられていた。かれらはスミスのいう常識的な規則をわきまえていたが、第11講で問題とされるシャフツベリは、「論理的思考 *reasoning* において深みを欠いていたので、内容に欠けているものを言葉の装飾によって補おうとした」と評価されている。*L.R.*, p. 54, 邦訳 152ページ。

5) *L.R.*, p. 51, 邦訳 147ページ。

とばのあやはそれ自体の本質的価値をもつものではない¹⁾と考えるのもこういう観点からである。

次に「文章構成の諸原理」については、スミスはまず論説 **discourse** を「単にある事実を述べるもの」と、「なんらかの命題を立証するもの」に大別し、前者を説話文 **narrative discourse** と呼び、後者を教訓文 **didactic discourse** と修辞文つまり弁論文 **rhetorical or oratorical discourse** に分けている。²⁾ 12講から20講までが説話文に当てられているが、そのうちの16講まではさまざまな事実、対象³⁾をとりあげ、それらを、(1)いかなる事実が叙述されるに適しているか、(2)いかなる仕方で叙述されるべきか、(3)諸事実がどのように配列されるべきか、(4)いかなる文体によってそれらがもっとも都合よく表現されるか、(5)いかなる著述家たちがこれらの分野においてもっともよく成功しているか、という観点から考察している。⁴⁾ そして残りの17講以降では、ここでうちたてられた一般規則を、歴史的な文体⁵⁾（および詩⁶⁾）、教訓文、弁論文に適用することに

- 1) 「話し手の感情が、きちんと、明確に、率直に、そして巧みに表現され、かつ、かれが……同感によって *by sympathy*, 聞き手に伝達しようとする情念や感動が率直に巧みに打ち出されていれば、そのときこそ、表現は言語がそれに与えるすべての美と力とを有するのである。ことばのあやが導入されているか否かなどはまったく問題ではない。……ことばのあやは、それがたまたま〔話し手の〕感情を表現する正当で自然な形式となっている限りにおいてだけ、文の美に貢献する、あるいは貢献しうるのである。」 *L.R.*, pp. 22-3, 邦訳 96-7ページ。
- 2) *L.R.*, pp. 58, 124, 邦訳 157, 261-2ページ。
- 3) スミスは **facts (objects)** を単純なものと複雑なものに大別し、前者を外面的・可視的なもの（人間の心の外に生起する事件）と内面的・不可視的なもの（人間の心の中に生起する思想、感情、意図）に区別し、後者つまり複雑な対象を可視的な人間の行動と不可視的な人間の性格に分けている。 *L.R.*, pp. 58-9, 邦訳 158ページ。
- 4) *L.R.*, p. 59, 邦訳 158ページ。
- 5) 「歴史はこの両者〔外面的事実と内面的事実〕から成っているので、歴史書の意図は、さまざまな国民に生起する顕著な事件と、往時のもっとも著名な人々の意図、動機、意見を、歴史が物語ろうとしている諸国家の大きな変化や革命を説明するのに必要なかぎり記述することである。」 *L.R.*, p. 59, 邦訳 158ページ。
- 6) 「〔説話文のところで定めた〕同じ規則が同じく詩 **poetical composition** にも適用

アダム・スミスとレトリック

なるのである。古代のレトリックは専らこの最後の弁論文に関心を寄せていた。これは「ある特定の人物，地域社会，行動などを称賛したり，非難したりすることによって，人びとをある特定の行為におもむかせたり，それから退けたりする」¹⁾ 演示型弁論と，「国家の重要事項についての会議，集会において用いられる」²⁾ 討議型弁論と，「法廷での議事において用いられる」法廷弁論に分かれる。伝統的なレトリックの特徴である，トピックを利用する技術的な立証，および配列に関する複雑な6部門構成（スミスは5部門構成としている）に対する批判は法廷弁論のところで展開されている。

「本格的な弁論はすべて，五つの部門から成り立つものであるといわれている。主たる部門は，まさしく，二つである，すなわち命題の設定とその証明である。³⁾ しかしこの二つの部分を適切に連結し，最も明確に提示するには，弁論は自然に五つの部分に分かれるといわれる。第1部は序論であって，ここで弁論家は，簡潔に自己の演説の目的と，かれが相手方を有罪とし，自己の弁護依頼人の無罪を論じようとする点を説明する。第2部はいわゆる解説である。弁論家はここで，後に立証しようとする事実を陳述するだけでなく，立証しえない部分を自己の意図に最適なやり方で自発的に埋め合わせるために，事件の全貌を一つの脈絡ある物語に仕上げるのである。……近代の裁判所では解説が行なわれることは決してない。……他の三部分は，確認，反駁，結論である。確認とは申立てた諸事実

可能である。というのは，歴史詩と歴史書との間の本質的な相違を形成しているのは何であるのか。それは後者が散文で書かれ，前者が韻文で書かれている，ということにすぎないからである。……〔韻文で書く〕作家の目的が読者に楽しみを与えることにあるということは明白である。」*L.R.*, p. 113, 邦訳 244-5ページ。

- 1) 「演示型 *demonstrative* と呼ばれる理由は……それが主として，弁論家の雄弁を誇示する *demonstrate or point out* ことを意図したものである。」*L.R.*, p. 59, 邦訳 159ページ。
- 2) *L.R.*, pp. 59-60, 邦訳 159ページ。
- 3) 「教訓文および弁論文は二つの部分から成り立っている。すなわち，主張する命題とそれを確証するために持ち出される証明とである。このことは，その証明が，われわれの理性と健全な判断に向けられた厳密なものであっても，あるいは，われわれの感情を動かして，なにがなんでも説得させるために採用されたものであっても，あてはまる。」*L.R.*, pp. 84-5, 邦訳 201-2ページ。

の全部あるいはいくつかを立証することをいう。そしてこのことは前回の講義で私が述べたいいくつかのトピックからひき出された議論を展開することによって行なわれる。反駁、すなわち相手の議論の論破も同様にして行なわれる。後期の弁論家たちは修辭家たち *rhetoricians* の定めた規則を厳守した。……原因、結果、時期等々のトピックから議論を導き出さなければ、おそらく手を抜いたと考えられたであろう。キケロはそのミロ弁論演説において、原因についての三つのトピックすべてから議論をひき出している。すなわち、ミロにはクロードゥスを殺す動機がなかった、殺人はかれの性格に合致しなかった、かれには機会がなかった、という議論である。これらは、この場合〔ミク・クロードゥス事件〕にはあてはまらないと考えられるが、しかもかれはそれらすべての議論を展開しているのである。かれは、かれら〔ミロ・クロードゥス両派〕が毎日けんか口論をし——ミロがクロードゥスを殺す意図を公言さえしているのに、ミロには殺人の動機がないこと、ミロは以前に20人もの人を殺しているのに、殺人がミロの性格に合わないこと、そしてミロが実際にクロードゥスを殺したことをわれわれが知っているのに、ミロには機会がなかったことを立証しようとしているのである。¹⁾……結論とは、演説の中ですでに述べた部分において展開された議論全体を、予定された結末へ自然に導くように配列して、簡

- 1) キケロのこういう態度に対してスミスは次のようなコメントを加えている。「レトリックと論理学あるいは弁証術 *Rhetoric and Logic or Dialectic* は、疑いもなく、古代人のあいだで最大の進歩をとげた学問 *sciences* であった。そして道徳 *Morals* の一部を除けば、一応の程度に発達した学問はこれだけであった。それゆえ、それらが流行の学問であり、流行に敏感な上流人士は誰でも、これらの学問に通じていると思われることを望んだであろう。それゆえキケロは全著作において、これらの学問の完全な知識を誇示しようと企んで、それに成功した。しかし、かれはこれらの学問の規則を厳守しているのであるが、その厳格さは、すべての細部に通暁していなければ無学のしるしと見なされるということさえなかったなら、かれはあえてそうしなかったと思えるほどである。」*L.R.*, pp. 175-6, 邦訳344-5ページ。こういうスミスの視点は、「比喩やことばのあや」ならびに「トピック」の人為的な分類・細分類に対するかれの嫌悪感 (*L.R.*, pp. 23, 166-7, 邦訳 98, 331-3ページ) とともに、学説体系を批判する際のメルクマール(「学説内における良識 *good sense* の墮落」「既存学説の権威化、偏向化」)につながってゆくものである。拙稿「アダム・スミスにおける『同感』と『観察者』——スミス『天文学史』の一解釈をふまえて——」『関西学院経済学研究』1972年12月、5-7ページ参照。

アダム・スミスとレトリック

潔に要約することである。ローマの弁論家たちは、この要約に判事の心を動かしていずれか一方に判断を下させるような若干の議論をつけ加えるのが通常であった。¹⁾

古代の世界において、技術的立証が重視せられた理由として、スミスは当時の法廷を支配していた混乱ぶりをあげている。判事たちは、法律の専門的技能を持たない人々であり、その在職期間はきわめて短かく、多くの場合、ある特定の一裁判だけのために選ばれた人びとであり、しかもその人数は常に相当多数であった。²⁾ 技術的立証によって聴衆を説得しうるのは「散漫な注意力と無知蒙昧が存在する場合だけである。³⁾」これに対して、判事たちが法律家としての教育を受け、法律について完全な知識を有している今日の英国の法廷においては「立証できる事実と、できない事実とをないまぜて、前者との関連において後者を真実らしく見せることを唯一の目的とする解説などを用いる余地はないのである。直接の証拠を提出できないような事実は何の重みもないので、この種の解説は何の役にも立たないのである。⁴⁾」

教訓文は、講義の順序としては、演示型弁論と討議型弁論の中間に置かれているが(第24講)、説話文についての講義をすべて終えたあとでスミスは次のように言っていた。「今や私は、文章構成のもっとも簡単な二つの方法、すなわち説話体と歴史体について、私が必要だと考えるすべてを述べてしまったので、次に第三の方法、すなわち教訓文に進んでしかるべきであるが、それについての規則はきわめて明白であるので、それをとばして、直ちに弁論体の考察に進みたい。⁵⁾」ハウエルは、もしもスミスがこの言明どおりに、かれのレトリック体系から教訓文の考察を除くことに決めてしまったのなら、「そのような決定は、新しいレトリックについてのイギリス最初の論説〔スミスの講義〕が、かつては弁証術 *dialectic* の特性であったものを、新しいレトリックの管轄権

1) *L.R.*, pp. 172-6, 邦訳 339-46ページ。

2) *L.R.*, p. 190, 邦訳 366ページ。

3) *L.R.*, p. 172, 邦訳 340ページ。

4) *L.R.*, pp. 190-1, 邦訳 367ページ。

5) *L.R.*, p. 124, 邦訳 261-2ページ。

内にもちこむことに失敗することになったことを意味したであろう。またそれは、新しい論理学からはすでに学問上の関心の対象とされることを拒否された教訓文が、いまだに新しいレトリックの領域に入ることが適格だとは言明されておらず、したがって、伝達の企てにおいて、その伝統的な提携者とはいかなる関係も持たずに、ひとりで宙に漂っていることをもちろん意味したであろう。」と述べている。¹⁾ しかしスミスは、自らの言説をひるがえして、討議型弁論を述べたあとで教訓文の考察に一講義をあてているのである。学問的知識の伝達 **learned communication** を目的とする教訓文においては、説得 **persuasion**——これは弁論文の第一次的意図である——は第二次的な意図であって、教訓 **instruction** が主目的である。²⁾ スミスは教訓文の具体的な形態として学問の体系 **a system of science** をとりあげ、その方法として、ニュートン的なものと、アリストテレス的なものがあるという。前者は、「まず、一つまたはきわめて少数の原理を定め、それによって、いくつかの規則あるいは現象を説明し、それぞれを自然の順序にしたがって結びつける」もので、後者は「これこれの事柄を説明する予定であるということから述べはじめ、それぞれの事柄ごとに、先行の諸原理と異なるか、あるいは同一の原理を提出する」ものである。スミスは前者が「疑いもなく最も哲学的な方法である」と考える。³⁾ 両者は、古い論理学の領域においてはそれぞれ、総合、分析の概念によってすでに知られていたものであったが、⁴⁾ ハウエルによれば、スミスの貢献は次のところにあった。「スミスは……古い論理学から科学的知識の学問的提示を指導する理論と方法を借用し、これらの理論と方法をレトリックの理論に所属させることに

1) Howell, *op. cit.*, p. 560.

2) *L.R.*, p. 58, 邦訳 157ページ.

3) *L.R.*, p. 139, 邦訳 285-6ページ.

4) スミスは、ニュートン的方法を最初に試みたのはデカルトであるとしているが (*L.R.*, p. 140, 邦訳 286ページ), この方法はデカルトよりも約1世紀前の「〔ペトルス・〕ラムスが **method of science** と呼んだものであり、ラムスの直接の後継者たちが **method of synthesis** と呼んでいたものであった。」 Howell, *op. cit.*, p. 563.

アダム・スミスとレトリック

よって、レトリックに、かつてはレトリックと弁証術が古代の世界に対して持っていた役割を、近代の世界に対して持たせる機会を与えたのである。」レトリックは常にこの種の課題に応じる能力を有していた。一般の聴衆に訴える「理論と実際」は、有識者に訴える仕事にとって必要なことを数多く教えるからである。「しかし、論理学が学問的伝達の理論を支配し続け、レトリック自体が古代の儀式的なもの以外には目を向けようとしなかったあいだは、レトリックはこの課題に応じる地位にはなかった。レトリックにそのような儀式的なものを越えて視野を広め、論理学がもはや支配欲をなくした領域に対する管轄権を主張するように教えたのはスミスであった。」¹⁾

スミスのレトリックは弁論文のほかに歴史的、詩的、教訓的(哲学的)文章構成を含む包括的なものであった。フランスにおいては、ラパン René Rapin, ブーウール Dominique Bouhour, ロラン Charles Rollin らによって、こういう包括的な概念、つまり伝統的なレトリックとあらゆる種類の文芸上の創作と批評を含ませるような概念を表現する用語として **Belles Lettres** が用いられていた。イギリスに生れた新しいレトリックは、その新たな関心領域を命名するためにこのフランスから輸入された用語を用いたのであった。²⁾ ただラパンらにおいては、レトリックはベル・レトルの一部門として位置づけられていた

1) *Ibid.*, pp. 563-4.

2) *Ibid.*, p. 520. 個々の用例は別として、**Belles Lettres** が正式に English term として定着したのは1736年以降であった。同年に出版された Nathan Bailey 編集の *Dictionarium Britannicum* の第2版に **Belles Lettres** がはじめて英語としてとり入れられ、**Literature, the Knowledge of Language and Sciences** と定義されている。*Ibid.*, p. 532. (それ以前は、**fine Letters, Politeness, Polite Learning, Learning, Knowledge, fine Learning** などと訳されていた。*Ibid.*, p. 525.) ロランの『ベル・レトルの教授・研究法』(1726-28年)が1734年に英訳され、そのタイトルに **Belles Lettres** がそのまま使用されたことがその大きな要因であった。(英訳タイトル: *The Method of Teaching and Studying the Belles Lettres, or An Introduction to Languages, Poetry, Rhetoric, History, Moral Philosophy, Physicks, &c.*) *Ibid.*, p. 532.

のに対して、スミスはレトリックにベル・レトルの全領域を担わせたのであった。¹⁾

Ⅲ スコットランド啓蒙とレトリック

われわれは本稿第1節において、18世紀スコットランドの **literary clubs and societies** の関心は学問的知識の伝達、内容の表現能力の養成にあると理解した。ところでこういう側面に対するスミス自身の関心は、当時の『エディンバラ評論』²⁾の第2号へのかれの寄稿において見出される。これは、編集者あての書簡の形態をとり、「評論」の範囲をスコットランドに限定せず、外国の重要な出版物にも目を向けるべきであるという助言をすることにより、広くヨーロッパの学界展望ともなっているものである。ここでスミスは「学問、貿易、統治、戦争における二大競争国」³⁾であるイギリスとフランスの文学上、哲

- 1) ハウエルによれば、ロージアンは「〔スミスの講義〕は、われわれの知る限りでは、英国において行なわれたその種のものとしては最初のものであった」としている点においては正しいが、「類似のものはすでにパリ大学のロランによって行なわれていた」(L.R., p. xxiii, 邦訳 26ページ。)とする点において誤っている。なぜなら、ロランの講義は、伝統的なキケロのレトリック理論に基づくものであって、「英国においては、その匹敵物は、グラスゴウ大学のアダム・スミスの講義においてではなく、グresham・カレッジの〔18世紀キケロ主義者である〕ジョン・ウォードの講義の中に見出される」からである。Howell, *op. cit.*, pp. 547-8.
- 2) 「選良協会」の会員たちによって企画された *Edinburgh Review* は、第1号を1755年8月、第2号を翌年の3月に刊行しただけで廃刊になった。McElroy, *op. cit.*, p. 64. 編集者はウェダバーン Alexander Wedderburn であった。スミスは第1号においてサミュエル・ジョンソンの *Dictionary of the English Language*, 1755 の書評を行なっている。なお最近、『エディンバラ評論』の第1号と第2号の全内容の microfilm copy による reprint が水田教授によって行なわれた。The *Edinburgh Reviews & the Scottish Intellectual Climate—Materials for the study of the Scottish Enlightenment—edited with a preface by Hiroshi Mizuta*. 『調査と資料』第55号, 1975年3月.
- 3) *Edinburgh Review*, No. 2, p. 65 [p. 80. 以下括弧内は前掲『調査と資料』のページ数], *Early Writings of Adam Smith*, ed. by J.R. Lindgren, 1967 (以下

アダム・スミスとレトリック

学上の著作を次のように比較考察している。

「想像力，天才，発明はイギリス人の才能であり，趣味，判断，適宜性，秩序はフランス人の才能であるように思われる。古いイギリスの詩人，シェイクスピア，スペンサー，ミルトンなどにあっては，ある種の変則性と奔放性が見られるにもかかわらず，その間にしばしば表われる想像力の強さは非常に広大であり，非常に巨大かつ超自然的であるので読者はそれに驚かされ混乱させられ，ついにはかれらの天才を賛美するのあまり，かれらの著作の不均衡さに対するあらゆる批評を取るに足りぬ無意味なものとして軽蔑するにいたる。すぐれたフランスの作家には，そのような天才のほとぼしりが見出されることはずっとまれであるが，そのかわり，正しい配列，正確な適宜性と端正が，感情と用語の一樣で熟慮された優雅さと結びついている。こうしたものは，想像力の激しい瞬間的なひらめきのように心を打つことは決してないけれども，それだけに，何か不条理なものや不自然なものによって判断を誤らせたり，文体の著しい不均衡や方法における関連性の欠如で注意力を疲れさせるようなこともなく，快適で，興味深い，そして関連のある諸対象の規則正しい継起によって心を楽ませるのである。……〔自然哲学においては〕フランス国民の特有の才能は，あらゆる対象を，何ら努力しなくてもそれについてゆけるような自然で単純な秩序に配列することにあると思われる。イギリス人は発明することに全精力を費やし，これに比べてその発明したものを整理し，方法づけ，それらをもっとも単純で自然な仕方で表現するという，名誉は劣るが同等に有益な仕事を軽蔑してきたように思われる。」¹⁾

スミスは両国を比較して，どちらの特徴がよりすぐれているかというような判断は下していないが，明らかに読みとれるのは，知識の伝達という地味な分野が軽視されていることに対する不満である。²⁾ 当時刊行されたばかりのフラン

E.W. と略す)，p. 17. 大道安次郎訳『国富論の草稿その他』創元社，1948年，294ページ（訳文加筆，以下同様）。

- 1) *Edinburgh Review*, No. 2, pp. 65-7 [pp. 80-81], *E.W.*, pp. 17-8, 邦訳 294-7ページ。
- 2) 「現代のイギリス人はかれらの祖先の発明を凌駕したり，祖先の名声に匹敵することにおそらく絶望しているので，科学〔自然哲学〕において第一流の地位に達することはできず，さりとて第二流の地位につくことは潔しとしなかった。したがって，

ス百科全書 *Encyclopédie* を高く評価し、その編者ディドロとダランベールの努力に敬意を表しているのも、この分野をスミスが重視しているからに他ならない。スミスにとって「すでになされた観察をより完全に収集したりより良き秩序に配列する」部門も、「観察の公共のストックに何物かを付加する」部門と同様に重要なのである。

スミス当時の文学的諸団体においては、その関心は知識の内容よりもむしろその伝達、表現にあった。¹⁾ スコットランド啓蒙におけるこういう側面をその基盤において支え、同時に広汎な学問領域に関心をいさぐ当時の著作家たちの知的基盤となっていたのが、スミスによって一つの体系にまで仕上げられるに至る新しい形態でのレトリックであったということが出来る。というのも、「ベル・レトル協会」の有力な会員であった William Lothian の言葉をかりれば、「liberal studies を伴わなければ、深遠な哲学者も、体系的な神学者もかれらの知識を伝達しようと努力しても無駄に終わるであろう」⁴⁾ からである。スミスは旧来の論理学とレトリックから、時代の要求にふさわしい知的伝達の理論を a system of Rhetoric and Belles Lettres においてうちたてようとしたのであった。スミスによって開拓されたこの包括的な「新しいレトリック」は、キャンベル、ブレア、ウィザスプーンに受け継がれてゆくが、それ以上の進展はみられず、狭義の文学と、狭義のレトリック(stylistic and elocutionary rhetorics)に分裂してゆく。⁵⁾ 有能な後継者がいなかったことがその表面的な理由とし

その研究をまったく放棄したように思われる。」 *Ibid.*, p. 68 [p. 82], *E.W.*, p. 19, 邦訳 298ページ。

- 1) *Ibid.*, pp. 66 [p. 81], 68-9 [p. 82], *E.W.*, pp. 18, 20-1, 邦訳 296, 299-302ページ。
- 2) *Ibid.*, p. 72 [p. 84], *E.W.*, p. 23, 邦訳 304-5ページ。
- 3) 「これらの〔諸団体の〕討論においては、matters of fact は matters of form and expression に比べればそれほど重要ではなかった。」 McElroy, *op. cit.*, (Introduction) p. ii.
- 4) *Ibid.*
- 5) Howell, *op. cit.*, pp. 712-5.

アダム・スミスとレトリック

てあげられるであろうが、¹⁾より根本的な原因は、18世紀の **New Rhetoric** は **Scottish Enlightenment** と盛衰に共にしていたということであろう。²⁾

-
- 1) 「〔T.リード, D.ステュアートに代表される〕18世紀の新しい論理学は、すばらしく有能な解釈者を19世紀においてジョン・ステュアート・ミルにおいて見出した。しかし、アダム・スミスとジョージ・キャンベルによって生み出された新しいレトリックは、ジョン・ステュアート・ミルを見出さなかった。」 *Ibid.*, p. 716.
 - 2) 18世紀の終りごろから設立される **societies** は、初期の内容の豊富な “**literary**” **clubs** ではなく、次第に専門領域の **professional and specialist societies** になってゆくようである。McElroy, *op. cit.*, pp. 128 ff.